

## みちのくボランティア紀行

鵜 由利

2011 年 8 月 15 日

### 始めに

未曾有の大震災。私たちは、これに対してどう向き合っていけば良いのか。福島第一原子力発電所の災害に端を発した原子力発電の問題に対して、私たちはどう向き合っていけば良いのか。3月11日の東日本大震災は、私たちに対して、歴史上の大きな転機をもたらそうとしているようである。思えば、戦後数十年、日本人は平穏な時代を過ごしてきた。これは、政治体制や経済においては、世界のバランスの中でうまく渡り合える環境であった。また、自然災害においても、台風や豪雨などの災害はあったが、今回の東日本大震災のような超巨大な災害に見舞われることはなかった。ここにきて、日本は、政治的にも経済的にも大きな問題に直面している。さらに、自然災害においても、大きな問題に直面しつつあるようである。叫ばれる東海、東南海、南海の巨大地震、いくつかの火山の活動の活発化など、日本を取り巻く自然環境がいわゆる活動期に入ってきたと思われる状況となっている。

このような時代に突入してしまった以上、私たちはどのように対処していくかを真剣に考えなければいけないと思われる。3.11を、1つの大災害と捉えるのではなく、私たちの今後の進路を決めるための試金石と考えるべきではないだろうか。そのためには、実際に起こったことにきちんと向き合い、どのように行動すべきかを考え、来るべきあらたな苦難というものに対して備える必要がある。

どのように備えるかといって、今まで何も経験していない私たちに回答があるはずがない。しかしながら、直接被災地を目にし、被災者と直接向き合うことはできるはずである。その1つの手段は、ボランティア活動に加わることであると思われる。来るべきあらたな苦難に対しては、一人の人間あるいは人間の創造物の弱さというものをきちんと認識することから始める必要がある。その上で、人間が集まり意志を一つにすることで、苦難を乗り越え、新しい世界を作っていけるものと信じている。

東日本大震災で被災された皆様に対して、謹んでお見舞い申し上げますとともに、一日でも早く普段通りの生活に戻ることを祈願いたします。

## 第1章 大地震、そして、みちのくへの思い

午後 8 時半を回っていた。家の玄関の明かりが見え、外見からは被害がなさそうなことが分かったと、ほっとした気持ちになった。何十回電話をかけた後、妻の安否と家の無事は確認してはあったが、やはりこの目で確かめるまでは一抹の不安があった。帰宅路は、何度かタクシーで通ったことのある道であったので、迷うことはなかったが、さすがに 2 時間超、しかも皮靴での歩きというのはきつかった。それでも、たかが 2 時間、まだまだ帰宅時をとぼとぼ歩いている人がいると思うと、この杉並の館が天国のように思えてくる。いつかこのような日が来るとは思っていたが、実際に帰宅難民となってみると、なんとなく自分も被災者の気分になるが、たかが 2 時間だけの期限付き被災者である。

家に入ると、まず目に入ったのが、いたるところで火災になっている気仙沼のライブ映像であった。地震発生以来、オフィスでの避難指示やら、倒れたコンピュータ・ラックの整理やらがあり、ウェブすら見ていなかった。そのため、被災地の映像を見るのはこの時が初めてであった。「気仙沼一体、丸焼けだよ」という妻の声に、「魚屋の魚新さんや、鮨屋の大寿司さんは、どうなったかな。せめて生き延びてほしい。あの、対岸にあった神社は、まともに津波を受けただらうなあ」ということがすぐに頭に浮かんできた。

久しぶりに 1 週間の休暇をもらい、妻と「みちのく」の旅に出たのは、まだ半年も経っていない昨年 11 月のことであった。平泉には昔から興味が有り、一度は行ってみたいと思っていた。藤原三代の栄華、芭蕉の奥の細道の 1 つの舞台とはどんなものであったのか。

「三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなた有。秀衡が跡は田野に成て、金鷄山のみ形を残す。先高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入。泰衡等が旧跡は、衣が関を隔て南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。侂も義臣すぐって此城にこもり、巧妙一時の叢となる。『国破れて山河あり、城春にして草青みたり』と笠打敷て、時のうつるまで涙を落し侍りぬ。」

中学校の頃、空でいうことができたこのフレーズも、いまや断片にしか覚えていない。それに引き換え、「夏草や 兵どもが 夢の跡」という芭蕉の句は、永遠に忘れることがないと思われるほど染みついている。せっかくみちのくまで行くのであるから、三陸の太平洋の旨い魚も食べたいし、仙台の牛タンも食べたい。ということで、まず、気仙沼、そこから平泉を見学して、仙台、松島、塩釜と回って旅することにした。この旅の最初に行った気仙沼と、今、目の前のテレビに映る暗闇に浮かぶ火災の映像とのギャップに、様々な思いを巡らせることとなった。

## 第2章 みちのくの旅

2010 年 11 月 1 日、朝の東京はひんやりした空気に満たされていた。お昼に気仙沼でフカヒレ

丼を食べるということから逆算して取ったチケットを持って、朝 6 時過ぎに家を出た。ちょっと大きめのリュックを背負って、早めの通勤客とともに中央線に乗り、東京駅に着く。いつものながら、時間に余裕を持って行動する由利と、時間ぎりぎりに行動する妻との微妙な不協和音の中で、東京駅で朝食を買った。駅弁が食べたいと思っていたが、いざ売店で買おうとすると、やはりおにぎりやサンドイッチに手が行ってしまうのは、心変わりの早い由利の特徴である。7 時過ぎの東北新幹線で、一路、一関を目指す。そこから、レンタカーで気仙沼まで一気に行く予定である。

「もゝ引の破をつづり、笠の緒付かえて、三里に灸するより、松嶋の月先心にかゝりて、住る方は人に譲り、杉風が別荘に移るに、『草の戸も住替る代ぞひなの家』面八句を庵の柱に懸置」。奥の細道の冒頭の一部を思い出しながら、東京駅で新幹線に乗り込んだ。きっと、芭蕉も旅に出る時はワクワクしたに違いない。自分の今の気持ちと一緒にだろう、なんていう勝手な想像をしながら車窓を眺めた。これから 3 時間程度、新幹線から見える風景が「いとおかし」となるかどうか、すべては日ごろの行いということになるのであろう。

大宮を過ぎると、徐々に山の中の風景に変わってくる。晩秋というにはちょっと早く、まだ紅葉を残した木々に朝日がさして、常緑樹の深い緑とのコントラストが鮮やかであった。しばらく行くと、すっかり葉を落としてしまっているが、オレンジ色の実が鮮やかな柿の木が転々としている畑の中を進んでいく。冬が近いということで、東北の太平洋側も時々時雨れるようである。福島から宮城に抜けるころには、朝方降った雨が上がり、それに朝日が差し込んできれいな虹を作っていた。地面から出て地面に落ちる完全な半円形の虹であり、由利はこのような虹を見たのは初めてであった。旅の前途は揚揚。

作物の終わった田園風景の間を縫っていき、遠くに見えるのが栗駒ヶ岳であろうか。ちょっと雪をかぶった姿から、「鹿の子まだらに雪の降るらむ」なんていう短歌の一部を思い出したが、そんなに風流なものではない。仙台を過ぎると、「やってきたな」という気分になった。そして、一関駅に到着。駅でレンタカーをして、ナビを気仙沼の大寿司さんの住所に設定して、いざ出発となった。すぐに山間の道になり、紅葉と枯れ木、それに田園風景の中を車を走らせる。点々と古民家風の建物が連なる部落をいくつか抜けていく。隣を走っている電車としばし並行して競争となったが、こっちの方がスピードでは勝っていて、徐々に引き離していった。由利は、こういうアップダウンがあり、そこそこカーブのある道をドライブするのは好きである。アクセルワークとカーブでの立ち上がりの加速感は、乗用車といえども気持ちのいいものである。そうこうしているうちに、気仙沼市街の標識が出てきたが、ナビは幹線道路の方を指示しているのでナビ通りに走っていくことにした。トンネルを超えると、右側に気仙沼市街が開けてきて、由利はそちらに向かって進んでいくと、まもなく大寿司さんの前に到着した。

### 第 3 章 初めての気仙沼

大寿司に着いたのは 11 時半ころであった。妻は今回の旅の一番の目的をフカヒレ三昧と決めて

いたので、迷わずフカヒレパイスープから取り掛かった。由利は、フカヒレ寿司を含む寿司の盛り合わせを注文した。フカヒレがどのように寿司になってくるのかと思ったが、しっかりとした味と柔らかい身が合わさって美味であった。妻は、横でフカヒレパイスープを満足そうに食べていた。まるで、明日はプリプリの肌になるのを想像しているような顔であった。その他、地のものをいくつか食べた。大将から、「今夜はどこに泊まるのか」と聞かれたので、「富士旅館」と答えると、「あれは、駄目だよ。向こう岸のホテルの方がずっといい。なんなら、俺が交渉してやろうか？」というので、地元の人がそう言うなら、ということをお願いした。確か、事前に予約を取ろうとして取れなかったホテルだったが、大将が電話するとすぐにオーケーが出た。大将は、続けて、「気仙沼はどこか観光するのかい？」と聞いてきたので、「どこか良いところはありますか？」と聞き返すと、「気仙沼を一望するなら、この裏だな。そこの道を真っすぐ上っていけば、気仙沼の港が一望できる。後は、唐桑の方も良いし、潮吹岩もきれいな景色だな。」とのことであった。食通の妻が、「海産物を買うならどこが良いですか？」と尋ねると、大将は、「うちは、魚新さんから取ってるけど、行ってみたら。市場の目の前だよ」とのことで、地図で場所を教えてもらった。

大寿司さんを出て、まずはその高台へ行ってみることにした。細い山道を車を飛ばしていくと、5分ほどで見晴らしの良い場所に着いた。降りて見ると、なるほど大将のお勧めの場所だけのことはある。気仙沼の港が一望でき、入ってくる船の白波に光があたって、とてもきれいな景色である。リアス式の入り組んだ港から続く太平洋を望むことができた。まさに、天然の良港、これであれば、船もゆっくり体を休めることができるだろうという感じであった。

そこから、一路、潮吹岩の海岸を目指して車を進めた。海岸線の道から畑の中を抜けて潮吹岩にたどり着く。時期が時期だけに、海岸のレストランも閉まっていた、静かな佇まいの海岸である。「潮吹岩ってのはどれだろう」ということで、海岸にある地図を見ると、この辺り一帯の岩の間から、タイミングが良ければ大きく潮が噴きあがるとのことであった。しばらく見ていたが、写真にあるほどの高さまで潮が噴きあがることはなかった。しかし、景色はとても素晴らしい。左右に開けた海が、太平洋の荒波を受けてきらきらと光っている。海岸の大きな岩に波がぶつかって砕け散る荒々しさは、太平洋を庭にする男たちの世界という感じである。

潮吹岩から気仙沼に戻り、市場を見学しながら魚新さんを探した。確かに、市場の目の前にあり、店の前にずらっと並べられた魚たちや、氷に付けられた魚たちが置かれている風景は、まさに漁港の魚屋さんである。直ぐに帰るわけではないので、なま物を買うことができなかったのであるが、ここぞとばかりフカヒレにはまっている妻は、フカヒレのバックを買って郵送してもらうことにした。気さくなお母さんで、ついでにワカメを付けてくれることになった。

そこからホテルはすぐそばにあり、チェックインして風呂に入り、夜に備えることにした。この風呂は、温泉で塩分があり、肌がつるつるになり、とっても気持ちの良いものであった。さて、夜の部を楽しむかということで、タクシーで気仙沼の町中に繰り出すこととした。今度は、フカヒレではなく、地の魚を食べに寿司屋に入った。残念ながら、先週台風が来ていたために船が出ていなかったということで、新鮮な地の魚を食べることができなかった。ホテルへの帰りは、海

岸沿いに歩いて行った。水揚げのため停泊している船のエンジンの音の中を、港を眺めながら歩いた。対岸を見ると、お宮のようなものがあり、あとでホテルで確認すると「浮見堂」ということであった。ぽつんと立っているところは、ちょっと寂しげであるが、立派に港を守っているのだなと感じた。

## 第4章 いざ平泉

次の日は、ホテルを出てぐるっと気仙沼市内を回った。気仙沼の市内は、古い町並みが続いていて、歴史を感じさせるところである。ここには、男山本店という有名な酒蔵もあり、古民家もあって非常に風情のある町並みであった。一回りしてから気仙沼を離れ、機能来た道を逆に一関を目指してドライブしていく。途中、道の駅があったのでちょっと休憩がてら見学する。岩手の野菜や卵などが並んでいて、地元の人が結構集まっていた。地元さんの米も売られていて、買って帰りたいもんだと思ったが、レンタカーでは持ち歩くこともできず諦めることにした。

一関から山の方に向かって、まずは巖美溪に行った。巖美溪は一関から車で20分ほど走ったところになる溪谷で、浸食でできた岩と川の造形美な場所である。この時期は、紅葉も終わりを迎えていたが、青空に紅葉の赤と岩肌のコントラストが美しかった。特に、橋の上から見る上流の溪谷は、川の微妙なカーブとゆったり流れる水が、そのまま空につながっていくような錯覚を覚えるように続いていた。ここの名物は、「郭公だんご」である。川の向こう岸の高いところにある茶屋から、だんごとお茶を籠に乗せてロープで川を超えて運んでくれるものである。注文を書いて、お金を載せて籠に入れ、木槌で板を叩くと、するするするっと音もなく籠が引っ張られていき、しばらくすると注文しただんごとお茶が同じ籠で運ばれてくる。川を越えてかなりの距離であるが、紙コップに入っているお茶もこぼれずに到着する。ロープを操る職人芸なのか、はたまた、自然のなせる技なのか、美しく滑ってくる姿はまるで天女が下りてくるようである。しばし、ほかの観光客が利用しているのを眺めていたが、やはりだんごを食べるのであれば茶屋で座って景色を眺めながらの方が良いだろうということで、川向うの茶屋まで歩くことにした。だんごは、これと言って特徴があるわけではないが、古の人も食べたかもしれない考えると、その素朴さに惹かれる感じがした。

巖美溪から平泉へは山の中の道を使って真っ直ぐ行くことができる。走り出すと雨が降ってきた。この時期の東北は、太平洋側でも時雨れるようである。山間の道を雨の中をドライブし、途中いくつかの遺跡横眼で見ながら進むと、やがて田園風景に変わる。この辺りになると、道も整備されていて非常にきれいである。世界遺産を目指しているためであろうか、あるいは、小沢帝国のなせる技なのであろうか、とにかく広くきれいに整備されている。整然と続いていく道路と平泉的な古風な町並みがちょっとアンバランスな感じがするが、藤原三代の栄華を観光する由利にとっては、あまり問題ではない。そうこうしているうちに、次の目的地である毛越寺に到着した。雨が降ったり晴れてきたりの変わりやすい天気の中、毛越寺の入り口から中に入っていく。参道をちょっと行くと大きな池が見えてくる。ここの最大の特徴である毛越寺浄土庭園である。なる

ほど、地図にあるとおりでかい。紅葉と常緑樹が池に映る池の周りには、まだ青々とした芝生が広がっている。この広々とした光景には、ここだけ時がゆっくり流れているように感じられる。さらに、池をぐるっと回っていくと、遣水という場所に辿り着いた。一見、枯れ山水かと思わせるような小川にはきちんと水が流れている。大きな池に比べてこじんまりした遣水の組み合わせが雄大さと繊細さを表現できているというように感じた。さらに池の周りを歩いていると、また雨が降ってきた。ちょっと雨宿りということで、常行堂の鐘のまで一休みすることにした。ここの鐘は有名ならしい。観光客が何人か来ては、鐘を打っていくので、それを聞きながら池を眺めるのもなかなか風流なものである。除夜の鐘ではないが、ちょっと煩惱でも落していくかという気分させられる。

毛越寺を出ると、いよいよ中尊寺である。毛越寺からは、車でちょっとのところにある。車を止めて、山門から中尊寺に入ると、さて困った。「平泉といえば中尊寺の金色堂」と馬鹿の一つ覚えのように思っていたので、こんなにいくつもの堂があるとは知らなかった。ま、時間があるので、順番に回っていくことにした。山道は大きな木に囲まれていて、のんびりと歩くにはなかなか良い。マイナスイオンをじっくり浴びながら古の文化に触れるということで、なんとなく脳ミソも活性化してくるような気になるのはなかなか面白いものである。いくつかの堂を見て回りながら、三道の坂道を上っていくと、いよいよ金色堂である。堂の中に入り、金色堂を正面から眺める。「ちょっと渋い」。金色に煌びやかに彩られた建物のイメージであったので、ちょっとがっかりしたが、秀吉の黄金の茶室でもないわけだし、厳かな雰囲気というところであろうか。流れてくる説明を聞きながら、極楽浄土を形作った建築物として見ていくと、なるほどこだわりを持って作られているようである。大きな感動というよりは、静かに文化に触れることができるものであるという感じがした。

中尊寺を出て、平泉最後の目的地である高館義経堂に向かう。きれいに整備されている中尊寺の周りから、普通の町中の道に代わり、ひっそりとした感じに変わっていく。どうやら線路を挟んで格差があるような感じである。やがて、高館義経堂の標識があり、車を止めて坂道を上っていく。入場料を払って、ここからは階段で上を目指す。義経堂とは一体どのような佇まいを残しているものなのだろうか。義経という悲劇の武将を、この平泉という地で、どのように表現するのか。非常に興味深いところである。また、ここは芭蕉の「夏草や。。」の舞台である。芭蕉がなにを思ってこの句を詠んだのか、ということを考えながら石段を上っていく。上りきると、その瞬間に大きな感動が湧いてくる。一気に開かれた目の前の広大な景色が、もう言葉を発する必要をなくしてしまう。まさに、「夏草や 兵どもが 夢の跡」という句がすんなり入ってくるものであった。目の前に大きくカーブして流れる北上川とその先にある広大な平原、そこからさらに緩やかに傾斜して山々に連なる。歴史がしずかにこの地に眠っているということが、素直に受け入れられる光景である。これを美しく俳句に落すことができた芭蕉と、ささやかな表現しかできない由利との違いはあるにしても、感じている内容は同じである、と本当に思える光景であった。しばらく景色に吸い込まれていたが、この景色を横目で見ながら高館義経堂までさらに上っていく。ここは、義経の像が入ったとても小さな館である。英雄を語るにはあまりにも質素な佇

まいであるが、これも悲劇の英雄としての輝きをさらに推し進めているのかもしれない。高館義経堂から、坂道を下って行くと、そこには芭蕉の句碑が立っている。「三代の栄耀一睡の中にして...」という奥の細道の文と「夏草や 兵どもが 夢の跡」の句が刻まれていることは言うまでもない。高館義経堂と芭蕉の句碑を結ぶこの坂道からは、ずっとこの雄大な景色が広がっていて、今でも義経と芭蕉を繋げているというふうに感じざるを得なかった。

## 第5章 そして仙台、松島

平泉、特に高館義経堂からの景色に感動を受けながら、次なる目的地の仙台を目指していく。一関駅でレンタカーを返し、新幹線で仙台に向かい、ホテルにチェックインした。仙台では、特に観光はせずに、舌鼓を打つことだけにした。明日朝は、電車で松島に向かうことになっている。仙台といえば牛タン。せっかくだから、和牛の牛タンを食べようということで、ホテルでお勧めの店を紹介してもらうことにした。聞くところによると、仙台の分厚い牛タンというのはほとんどが輸入物で、和牛の牛タンはあまりないようである。そのような状況の中で、紹介してもらった数少ない和牛の牛タンの食べれる店に行き、牛タンとテールスープを注文し、ビールをしこたま飲んだ。牛タンは、割と柔らかくておいしかったし、テールスープはなかなかの味であった。たらふく食って飲んで、ふらふらと歩いてホテルに帰った。

次の日は、JR 仙石線に乗って、とことこと松島に向かった。仙台近辺では通勤・通学電車であるものが、松島に近づくにつれて地元の路線電車と化してくるのはなかなか面白いものである。海が見えるようになって、海岸線を沿うように走るようになって、やがて松島に到着。約 1 時間の電車の旅であった。松島駅に着いて、駅前でホテルのバスに乗って、まずはホテルに向かう。ホテルで荷物をフロントに預け、いざ松島観光に出発する。同じように、ホテルのバスで松島の市街地まで送ってもらう。降りたところは、フェリー乗り場の近くで「右、瑞巖寺」という標識があった。由利は、「まつし〜ま〜の、さーよー、ず〜い〜がんじ。。。」と口ずさみながら、フェリー乗り場にある観光案内所に行って、今日の作戦を立てることにした。まずは、食事の計画から。昼は、牡蠣、夜は寿司と、ここはあっさり決まる。ホテルにあったパンフレットで、円通院の紅葉ライトアップというのが夜あるとのこと。これも予定しておこう。そうすると、まずは、松島の海岸をぐるっと一回りして、その後さかな市場で牡蠣を食べ、瑞巖寺近辺を散策して、一旦ホテルに帰る。その後、寿司屋で夕食を食べて、円通院の紅葉ライトアップを見る。完璧だ！海岸に沿った道路を歩き始めると、排気ガスの臭いに参った。臭いに敏感な妻は、いたたまれないというようにハンカチで口を塞いだ。せっかくのきれいな景色なのに、非常に残念であった。「ここは、70 年代の東京か？」と由利が言うと、「東京では、今はこんな排気ガスはないよね」と妻が言ってきた。「これは、もしかして石原都政のディーゼル対策の賜物なのか？」と由利は言った。本当かどうかの確証はないが、ディーゼルの排気ガス対策は全国的にやるべきだな、と思った。できるだけ、道路から離れて歩くようにして、海岸線を歩いた。「松島や ああ松島や 松島や」と芭蕉がいったかどうかは諸説あるようだが、芭蕉ほどの人があまりの絶景のために句

が読めなかったというのはどうも疑わしい。地図を見ながら、あれが何とかという島とか言いながら歩いていくと、ほどなく観光客用の海岸は終わる。駐車場には、中国人向けの観光ツアー一用のバスが何台か停まっていて、ひときは派手な色合いに中国人パワーを感じざるを得なかった。ホテルのあたりまで辿り着くと、ちょっと早いけれども昼食の時間になった。予定通り、牡蠣をたらふく食べることにしよう。一番有名なのは「かき小屋」だけれども、「さかな市場」でも牡蠣の食べ放題ができるということで、そちらで食べることにした。ぐるっと回って、通りに戻り、ちょっと奥まった「さかな市場」に入った。焼牡蠣 2 時間食べ放題、店の人がスコップで鉄板の上に乗せていく。が、鉄板の上では、焼きではなくて蒸しという感じである。焼き牡蠣というと、網の上に牡蠣を並べて下から炭で炙っていくものと思っていた由利にとっては、これが、松島流の焼き牡蠣の食べ方なんだという感じであった。牡蠣は小粒でちょっと期待外れであったが、11 月初旬のこの時期では仕方がないのだろう。大粒でおいしい牡蠣を食べるには、やはり年が明けてからの寒中を狙うのが常道だ。それでも満腹になるだけ牡蠣を食べ、さらに牡蠣に付いて焼かれていたムール貝がおもいのほかおいしかった。食事を終え、さかな市場を見学してから、今度は瑞巖寺の方に歩いていく。瑞巖寺に続く参道は、かなりの距離がある。両脇には杉の木立が続いていて、どれも非常に大木であり鬱蒼としていた。参道の脇にはもう一本の道が山に沿って続いている。こちらは、参道のように真っ直ぐではなく、山肌に沿って連なっていて、その山肌にはいくつもの洞窟がある。それぞれに石像などが置かれていて、厳かな雰囲気醸し出している。やがて、瑞巖寺の入口に辿り着いたが、お寺の中にそれほど興味があるわけでもないの、そのまま道伝いに円通院の方に歩いていく。こちらは、夜の紅葉ライトアップを見ようと決めていたので、周りの様子を見るだけにした。ちょうど係員らしき人がいたので、「紅葉のライトアップはきれいですか？」と尋ねると、「そりゃ、きれいだよ。今が一番最高だね」ということであつた。「それじゃ、夜出直してきます」と言ったところ、「あんたたちどこに泊まってるの？」と聞かれたので、「あの山の方のホテルです」というと、「あそこは、朝日がきれいなんだよ。松島から上がってくる朝日が。明日見れるといいね」とアドバイスしてくれた。新しい観光スポットを聞いたことで、明日朝は早起きしなければならないことになった。カーテンでも開けておけば、明るくなれば目が覚めるだろう、と気楽に考えることにした。

円通院から、さらに路地を抜けていく。土産物屋さんがいくつかあり、中を除いては次に行くということを繰り返していると、やがてもとのフェリー乗り場に戻ってきた。ちょっと時間は早い、ホテルのチェックインの時間も過ぎているのでホテルに戻ることにした。チェックインを済ませ、まずは大浴場で一風呂浴びて休憩し、やがて夕方になる。再度松島の方に向かい、まずは早いけれども夕御飯を食べようということで寿司屋に入った。握りの盛り合わせと日本酒で舌鼓を打っていると、そろそろ円通院の紅葉ライトアップの時間となり、円通院まで歩いていった。すでに、多くの観光客が来ていて、その中をチケットを買って入ると、一面ライトアップし紅葉した木がたくさんあるのがわかった。紅葉と地面に広がる苔にライトがあたり、紅、黄色、さらに緑のコントラストが鮮やかである。また、休憩場所になっているあばら家の丸い窓越しに、ライトアップした紅葉を覗く風景は、古の茶室から夕陽に紅く照らされた紅葉を見ているようで、



なんとも趣深い。さらに、院内をぐるりと回ると、これがまた素晴らしい。ライトアップした紅葉が、そのまま池の水にきれいに映って、全く同じ景色を醸し出している。こんなに鮮やかに池に移るのが不思議なくらいに、まったく同じ色で映っていた。さらに、紅葉の奥行きがそのまま池の中にも表現されていて、どこまでも深く続いていくような幻想的な風景を作り出していた。ときおり、アメンボが水面を微かに揺らすと、それに合わせて紅葉が風に揺れているようであった。しばし見とれていたが、「これは昼間にもう一度見て、種明かしをしなければ」と思い、明日朝もう一度来ることに決めた。入館料を 2 回も払うことになるが、このカラクリのためなら投資しよう。院の中では、ささやかなコンサートも行われていて、それを聞いているとそろそろホテルの迎えのバスが来る時間になり、それにのってホテルに帰った。

翌朝は、早めに目が覚めた。窓のカーテンを開けておいたので、白々と明けてくる朝の明るさとともに目覚めた。予定通りである。しばらくすると、朝日が水平線に上り始めると、その光が松島の島々を照らし始める。海面にまっすぐ延びる朝日とあたりの島々を半分だけ照らす朝日が明と暗を作りだし、これぞ「松島や ああ松島や 松島や」。言葉に出ない幻想的美しさであった。やがて、朝日が水平線から離れ、現実の姿に戻っていく。

ホテルをチェックアウトし、もう一度円通院に向かう。昼間の紅葉も、青空に映えて美しかったが、由利の心の中は、早くあのカラクリが知りたいということで一杯だった。やがて、池のほとりに来ると、池の水がやや白く濁っていた。ということは、あの鮮やかな写り方と奥深く吸い込まれるような光景は、この若干白く濁った水によるものなのか。由利は、これ以上考えるのは止めた。

## 第 6 章 松島遊覧、塩釜、そして旅の終わり

円通院を出て、フェリー乗り場に行き、塩釜行きのフェリーに乗る。松島の島々の間をぬってフェリーは進み、都度、島に付けられている名前の説明がある。牡蠣棚や漁をしている船を遠くに眺めながら、やがて、水産工場のようなものが見えてくると塩釜到着である。マリングート塩釜というところに到着し、外に出てみるときれいに整備されているのがわかる。いわゆる漁村とはかなり雰囲気が違い、再開発された港というイメージであった。まずは、腹ごしらえということで、鮓屋さんを探して本塩釜駅前に行く。昔ながらの露天市場のように店が集まっているところで、見学をしながら、さかな屋さんのおかみさんに「ことぶき寿司に行きたいのだけれども、どこにありますか」と聞いた。あらかじめ人気店の「ことぶき寿司」を調べたあったので、その場所を聞こうとしたら、「ありゃ、高いだけで上手くないよ。ついてきな、良い店教えてあげるから」ということで、店をそっちのかで案内を始めてくれた。ずいぶんきさくな人だなあ〜と思いながらついてくと、「寿司まさ」という店を指さして、「地元の人はこっちにいくよ。間違いないから入ってき」と言い終るとすぐに去って行った。なんという早業。地元の人が言うのなら間違いないだろうということで、「寿司まさ」に入ることにした。まずは、刺身の盛り合わせとビールを頼んで酒盛りを始めた。これが、今回の旅の最後の食事になるので、刺身を平らげると寿司

を一人前、ペロっと行ってしまった。食べ終わると、最後の観光地の塩釜神社に行くことにした。「登りは大変だよ」というおかみさんの助言もあり、駅前に戻ってタクシーで行くことにした。塩釜神社には約 10 分で到着。これなら歩けたな、と思いながら境内を歩き回った。帰りは下りなので、長い階段を下りていき、通りに出る。ここから駅まで、土産物店、食事処など見物しながら歩いていく。道路は広くきれいに整備されているが、周りのお店はそれなりに昔の佇まいを残しており、微妙なマッチングである。途中、阿部勘酒蔵に立ち寄り、ひやおろし純米吟醸を買うことにした。今日は帰るだけなので、持ち帰るのも苦にはならない。さてと、後は帰るだけか。本塩釜駅に行き、仙石線で仙台に向かう。仙台からは、東北新幹線で東京、そして自宅、と一気に帰ってきた。

## 第 7 章 3.11

2011 年 3 月 11 日、この日は日本の将来にとって大きな意味を持つ日になっていくであろう。この日は、金曜日であった。由利は、いつも通りに仕事を進めていた。金曜日、しかも午後になると、なんとなく週末モードになり、今日の仕事の納め所を考えていた。3 月もこのころになるとだいぶ春めいてきていて、もう少ししたら厚いコートもいらなくなる時期である。午後の柔らかな日差しが窓から入ってきている。今夜は雨になるかもしれないが雪になることはない、という天気予報であった。外はまだ寒さが残っているようだが、暖房の効いた室内は、春眠というわけではないが、なんとなく眠気を誘うような陽気であった。

午後 2 時 46 分。地震だ！ちょっと大きいかも、と思い、妻にメールを打つ。一言、「地震だ！」だけである。この後、しばらく連絡が取れなくなることを、この時点では予想していなかった。最初は、2 日前の震度 4 の時と同じくらいの揺れに感じた。しかし、今回はそこからが長かった。だんだん大きくなっていき、由利も立ち上がってディスプレイが倒れないように押さえた。それでもなお続く地震は、さらに揺れが大きくなり、そこかしこで何かが倒れる「ガシャン」という音が起こり始めた。由利の席の後ろの棚から、空の鉢が落ちてカシャンと割れた。「やばい、相当でかい！」と由利は感じたが、とにかくディスプレイを抑えるだけであった。

やがて、長い揺れもなんとかおさまると、周りを見渡して指示を出した。由利には、管理職としての責任がある。「周りで怪我した人がいないか確認！それと、壊れたものがあるかどうかを調べてくれ！」。すぐに館内放送があり「ビルから避難してください」とのことで、由利も「全員、早く階段で避難してください。下に降りたらマネージャはメンバーを確認するように！」と指示を出したところ、「コンピュータ室がめっちゃめっちゃです」という声があった。「触らなくていいから、とにかく避難」と、由利も指示を出し、全員がオフィスからいなくなったことを確認して自分も非常階段に向かった。ここは、20 階。「なんて長いんだ」と思いながら、それでも地上まで辿り着き、人数確認を始める。2 人足りない。「誰か知らないか？」と由利はちょっと不安になりながら聞いた。「たぶん、煙草を吸いに行っていたと思います」。「煙草か」、由利は吐き捨てるように言った。ほどなく、煙草組も合流し、全員の無事が確認できて、由利もほっとした。

さて、どうするか。ワンセグが唯一の情報の入手手段であった。「三陸沖、震度 7」、「JR 全線ストップ、回復の見通しなし」、「私鉄、地下鉄、全線ストップ」という連絡が次々に入ってくる。これでは、待つしかない。ほどなくビルの管理人から、「このビルは耐震構造でできていますから、オフィスに戻っていただいても大丈夫です」との連絡が入り、「本当かよ」と思いながら、再び 20 階までの階段に挑戦する。由利は、日頃スポーツはやっているので大丈夫だろうと思っていたが、さすがに 20 階に着く頃には足がパンパンに張っていた。オフィスに戻ってみると、いたるところのつい立が倒れ、コピー機も倒れ、コーヒーマシンも倒れて水が漏れている。コンピュータ室に行くと、ラックが倒れ、PC も何台か落ちていた。これでは、開発の仕事はすぐにはできないが、お客様からの問い合わせの対応はどうするか。東京はかなりやられているが、西日本は通常業務をしているだろう。すでに、午後 4 時は過ぎていたので、今日の業務は諦めることとした。お客様からクレームが来るかもしれないが、その時は謝るさ、と腹は括った。どうやら、役員会議が招集され、対策が協議されているようである。どんな指示が来るかと思っていると、電話が掛かってきた。「月曜日には通常業務できるように準備せよ」。「了解です」と由利は答えて、さらに「コンピュータ室がめっちゃめちゃなので、開発作業は月曜日に被害状況等をみながら、どのように進めるか決めます」と言った。それに対する返事に由利は耳を疑った。「週末、人を集めて修復し、月曜日から通常作業が行えるようにするように」。「おいおい。ほとんどのメンバーが、まだ家族との連絡すら取れていない状況だし、家がどうなっているかもわからない。東北に親戚のある人もいるだろう。この状況で、週末に出てくれなんていえるかよ」と、由利は思った。由利は、「週末は、メンバー全員休ませてください。月曜日に一気に修復作業をやりますから」とお願いし、了承を取り付けた。そこで、由利は、「とりあえず、コンピュータ室の中を安全な状況にして、今日は帰ろう。後は月曜日」と指示を出した。由利は、さらに、「作業終了後、適宜帰宅してください。帰宅できない場合には、ホテルの宿泊も認めます。それでも駄目な場合は、オフィスを使ってください。なお、社内メールは使えるようなので、各自、状況は適宜メールで知らせてください」。

作業を終え、由利も帰宅の途につくことにした。交通機関はすべて止まっているので、歩くことにした。経路は、タクシーで何度か通ったことがあるので大丈夫と思ったが、初めての経験なので、辿りつけるかどうか一抹の不安はあった。「帰宅難民」、いつかは来ると思っていたが、なんら対策を取っていたわけではない。今は、とにかく歩いてみる、それだけしかなかった。由利は、道路に出てみてびっくりした。老若男女、大勢の人が、蟻の行列のように歩いている。歩道は人ではぼ一杯である。道路は大渋滞で、車より歩く速度の方が早いくらいである。一部、歩道に入りきれない人が車道にもあふれている。いつもなら、こんなことをしたらクラクションの嵐になるし、だいたい、怖くてそんなことはできない。「みんな、どのくらい歩くつもりなのかな」と、由利は思ったが、まずは自分が道を間違えないようにしようと思った。皮靴で、しかも、雨になるかもしれないということで傘を片手に、もう一方の手には鞆を持っていた。外は結構寒く、コートを着ていても寒さを感じた。ただし、手袋をはめるほどではなかった。あまり無理をして歩くと、汗が出て冷えるので、適度な速さで歩き続けた。途中、ちょっと酒でも飲んで帰ろうかと

いう誘惑に駆られたが、とにかく家路を急いだ。妻とは、すでに一度連絡が取れていて、妻も家も無事なことは確認できていたが、とにかくこの目で早く見たいという気持であった。

予定通り、ほぼ 2 時間で家に到着する。午後 8 時半を回っていた。足に豆ができるわけでもなく、無事にたどり着くことができた。家の玄関の明かりが見え、外見からは被害がなさそうなのが分かれると、ほっとした気持ちになった。家に入ると、まず目に入ったのが、いたるところで火災になっている気仙沼のライブ映像であった。地震発生以来、オフィスでの避難指示やら、倒れたコンピュータ・ラックの整理やらがあり、ウェブすら見ていなかった。そのため、被災地の映像を見るのはこの時が初めてであった。「気仙沼一体、丸焼けだよ」という妻の声に、「魚屋の魚新さんや、鮎屋の大寿司さんは、どうなったかな。せめて生き延びてほしい。あの、対岸にあった神社は、まともに津波を受けたらなあ」ということがすぐに頭に浮かんできた。まだ、この時にはボランティアに行くとか言う考えはなく、目の前のテレビを見ていた。着替えを済ませ、会社のメールに到着を知らせ、残り物の夕御飯とビールを一杯で疲れを癒した。そうこうしているうちに、帰宅しましたメールが徐々に入り始めたので、みんななんとかなるだろう、と若干の安心感を持った。その後、とてつもない慌ただしさと、無事に切り抜けた安堵感と、20 階の階段の上り下りと、2 時間の徒歩というさまざまな疲労が重なって、爆睡に入った。途中、地震で目が覚めたこともあったが、また、すぐに眠りに入るという状況であった。

週末は、いろいろと連絡を取り合うのに忙しかったが、とりあえず月曜日に向けて英気を養うことにした。計画停電やら福島原発での水素爆発やら、刻々とニュースが伝わってくるが、会社も家も 23 区だし、原発も日本の技術力なら大事には至らないだろうと考えていた。

## 第 8 章 そして月曜日

「計画停電のため、電車がストップしている路線があります」。昨日からの情報である程度は予想していたが、駅に着いて由利はびっくりした。ホームが人で溢れかえっている。これでは、いつになれば電車に乗れるかわからない。なんとか、3 台見送ってから 4 台目に強引に乗ることができた。こんなことが毎日続くようであれば、とてもじゃないけどもたない、と由利は思った。会社につくと、予想通りかなりの人がまだ到着できていない状況であった。とにかくお客様からの問い合わせに対応できるだけの体制を整える。不十分であるが、この事態であればしょうがない。それから、コンピュータ室の修復に着手し、いくつか壊れた機器はあったが、大部分は動作することがわかってほっとした。

ちょっと落ち着いたところで、地震と原発の状況を確認しようということでインターネットをアクセスした。相変わらず、凄まじい津波の被害のニュースと原発の状況がレポートされていた。東京にいる我々にとっては、原発と計画停電の方が直接的に影響を受ける可能性があるため気になった。原発の事故としてはレベル 4、放射線物質の放出はそれほど問題ではない、という報道に対して、一抹の不安がよぎったため、この場合には海外のニュースの方が客観性があると思って CNN のサイトに行ってみることにした。行ってみて由利は驚いた。「日本政府は、レベル 4

といっているが、水素爆発により放射性物質が拡散している可能性があり、レベル 6 と考えるのが妥当」。「米国政府は、在日米国人に対して、50 マイル（80km）圏外への脱出を指示」。えへ、全然違うじゃん。レベル 6 ってことは、チェルノブイリにかなり近いくらいの大事故だ。あの時は、数百キロまで放射性物質の影響が広がったはずだから、もし、それに近い状況だとすると、東京だって危ない。なんなんだ、このギャップは。

会社の方でも、震災対策チームが作られ、今後の方針を検討し始めていた。計画停電による交通機関の問題のため、今週いっぱい自宅待機を認める、という結論が出ていた。由利も、メンバーに対して、自宅待機ではなく自宅勤務であることを明確にして、自宅での作業を認めることとした。これはこれで良いのだが、気になるのは原発である。震災対策チームの結論は、当面原発は問題ではないとなったが、それでは取り返しのつかないことになる可能性がある。由利は、独自に判断することにした。メンバー全員に対して、「東京から離れる場合の帰省先等の連絡先をあらかじめ連絡しておくように」という指示を出し、「もし、自宅勤務中に不測の事態が起こった場合には、家族を連れて逃げるように」という指示を出した。後は、みんな安全に行動してほしい、と由利は祈るだけであった。

## 第9章 ボランティアへの想い

1 週間も経つと、会社や生活の状態は落ち着いてきた。別に、東京にいる由利たちは被災者ではないのだから、時間が過ぎれば落ち着くのは当然である。テレビ等では、あいかわらず震災の爪痕や原発の問題が放送されている。由利も、今回の震災にどう向き合うのかを真剣に考えるようになってきた。確かに義援金や支援物資の提供を行っているが、なんかモヤモヤした気持ちである。これは、阪神淡路大震災の時には味わったことのない感覚である。あの時も、義援金を送ることで、自分なりに区切りをつけていたが、今回は何かが違う。被災地が、阪神淡路の時に比べると近いからなのだろうか、被害の規模がとてつもなくでかいからであろうか。

やがて、三月も終わり、こぶしの花の季節が終わり、桜の季節になった。今年は、例年よりちょっと遅めであったが、前の公園の桜はいつも通り満開の花をつけた。どうも、今年はなんだか季節感というものが感じられない。本来であれば、春ということで、なんとなくすがすがしく華やいだ感じになるはずである。それが、3.11 で季節も止まっているようであった。

このままではいけない。由利は、なにか直接的な行動を起こす必要を感じていた。被災地に直接赴き、被災者と一緒に活動し、自分の肌ですべてを感じ取らないと、このもやもやした気分は晴れない。なにか、歴史上の大きな動きの中に自分がいて、その動きを遠くから眺めるのではなく、直に感じなければいけない。由利は、おもむろに、ボランティアの活動を行うにはどうすればよいかをネットで調べ始めていた。

由利は、2 月から特別なプロジェクトに加わっていた。かなり会社の命運にも関わるプロジェクトであり、由利はその責任者であった。予定では、5 月一杯でこのプロジェクトは終わることになっていた。ボランティア活動について、いろいろと調べていたが、このプロジェクトが終わる

までは動きが取れない状況であった。プロジェクトは、震災の影響でかなり遅れていた。由利は、5月一杯の期限を死守し、6月になったらボランティアに行くことにした。このため、ゴールデンウィークをほとんど潰して、プロジェクトを進めることとなった。おかげで、というか、この時期にゴールデンウィークがあるというのは神の思し召しなのか、プロジェクトの遅れを取り戻すことができ、予定通り5月一杯の期限を守ることができた。

さて、どこにボランティアに行くか。今回の震災は、被災地が非常に広範囲であり、どこでもボランティアを必要としていた。ネットで調べると、3か月近く経っていたが、まだまだ瓦礫の撤去などの仕事を必要としているところが山のようにあった。数々のボランティア団体が現地に入って活動をしているが、ボランティアの数が圧倒的に足りていない状況である。由利は、震災以来気になっていた気仙沼にボランティアに行くことに決めた。去年、観光に行って以来、まだ、5か月も経っていない。その時に、最初に入ったところが気仙沼であり、その状況を見届けたい、また、少しでも被災者を助けたい、できれば、その時出会った人々の安否も知りたいということからであった。

気仙沼近辺で活動しているボランティア・センターを調べ、宿泊施設、食事の状況等が整っているように思えた唐桑地区を中心に活動しているボランティア・センターに行くことに決めた。それからは、会社への休暇申請、ボランティアに必要な装備の確保、ボランティア保険、災害車両申請などを進めた。「ボランティアを甘く見てはいけない。決して被災者に甘えてはいけない。すべて、自己完結せよ」。ボランティア経験のある妻から、事あるごとに言われていたため、準備には万全を期した。作業用の長靴、釘抜き防止用のソール。どのような瓦礫の場所に入るのかわからないので、釘抜き防止用のソールは必須である。それに、マスクとゴーグル。埃だけでなく、アスベストがあるかもしれないし、危険な液体が飛んでくるかもしれない。ヘルメットも必要である。着替えは1週間分用意し、万が一洗濯ができなくても大丈夫なように準備した。それと、寝袋。雑魚寝の場所はボランティア・センターが用意しているとのことだし、冬ではないので、寝袋1つで十分であろう。その他、虫よけスプレー、懐中電灯、水のペットボトル、食事用のマイ・カップ。食事は、御飯とレトルトはボランティア・センターで用意しているとのことであるが、個人用の食器は必要である。車のガソリンを満タンにして、空気圧の調整も行った。被災地なので、どのようなところを走ることになるのかもわからないので、ウインド・ウオッシャーも満タンにし、万全を期した。

## 第10章 いざボランティア

6月19日の朝、由利は、そそくさと荷物を車に積み込んで出発した。これから、500キロ超えのロングドライブになる。妻が早起きして作ってくれたおにぎりを、どこのサービスエリアで食べようかと考えるのも、ちょっとした楽しみであった。外環自動車道に大泉インターから入り、川口ジャンクションから東北自動車道に入る。料金所では、「災害派遣等従事車両」ということで、書類を見せるとそのまま通過できた。これも、妻が前もって区役所に相談に行き申請してく

れたもので、これには由利も感謝の気持ちで一杯であった。

都会の景色から、だんだんと田園風景と変わり、さらに車を飛ばして福島県に入る手前の那須高原サービスエリアで休憩を取る。11 時くらいになっていて、早めの昼食のおにぎりを食べると、これで日常から離れボランティア・モードに入るという気構えが出来た気がした。福島県に入る前に休憩を取ったのは、やはり原発による放射能の影響をできるだけ避けたいという気持ちからであった。過剰反応といえはそうかもしれないし、福島県の人にすれば失礼な話である。しかし、あまりに出てくる情報の信頼性が低いことや隠ぺいが見え見えの状況では、由利としても自己防衛に走らざるを得なかった。後でわかったことだが、那須塩原一帯にも放射能のホットスポットがあったということで、なんとも複雑な気持ちになった。

ということで、由利の車も、福島県内を抜ける間はエアコンを RECIRC にし、足早に駆け抜けた。「東北自動車道は、地震でかなり壊れていて、波打っている」という事前情報があったが、さすがに 3 か月経過しているし、日本の土木技術の優秀さもあるので、全く問題なく走れたが、ところどころにアスファルトが真新しい色になっているところを見ると、相当の被害があった様子がうかがえた。山間の緑が日の光を浴びて一段と輝いていた。

福島から宮城に入り、田園風景も眩しい中を車を走らせていき、金成パーキングエリアで 2 度目の休憩を取った後、一関インターで東北自動車道に別れを告げた。ここでも、「災害派遣等従事車両」証を出すと、料金所のおじさんが「遠くからご苦労様です」と声を掛けてくれた。旅行気分で来ているつもりはなかったが、気が引き締まる思いであった。一関の街並みから気仙沼に抜ける道は、去年の旅行の時にレンタカーで通った道である。所どころ記憶にある景色であったが、季節は夏ということで、青々とした水田風景や山の緑が鮮やかであった。地震の被害を全く感じさせない景色であり、この景色がいつテレビで見ていた破壊された景色に変わるのかというのが、ずっと頭をかすめていた。

一関から 1 時間ほどドライブして、気仙沼市内へ向かう道との分岐点に差し掛かる。目的のボランティア・センターのある唐桑半島までは、後 30 分ほど。3 時をちょっと過ぎていて、4 時の到着には多少時間があるので、気仙沼市内を一回りすることにした。まずは、この目で見届けたいという気持ちで一杯であったからである。気仙沼市内に入っても、さほど震災の影響を受けているようではなかった。気仙沼駅を通過しても、普通に街並みが続いていた。ところが、そこからちょっと海寄りにいくと様相は一変した。瓦礫こそあまりなかったが、骨格だけの家と空き地、電気も来ていないため空しく立っている信号、埃だらけの道路が続いていく。「確かこの辺り」と記憶を頼りに「昌寿司」さんの場所を探すと、跡形もなく空地になっていた。そこからさらに海岸に出ると、舗装された道路ではなくいわゆる砂利道になる。地震で地盤が下がってしまったため、道路が冠水しないように砂利で上げた道になっている。埃を巻き上げて砂利道を進んで、魚市場の方に向かった。ひっくり返った車や折れた電柱は、まだまだそのままだ状態であった。魚市場は、一応きれいに整備されていたが、周りがこれではいつ再開できるのだろうかと感じられた。魚市場の前にあった「魚新」さんの建物も、骨格だけになってしまっていた。一回りして海岸沿いを進んでいくと、一面瓦礫の景色が広がる。大寿司さんも、この辺りの一角にあっ

たはずである。近づくことができないので確認はできないが、どうみても家ごと破壊されてしまったとしか考えられない光景であった。テレビにも登場していた陸に上がった大きな船も、そのままの状態であった。完全に破壊されて瓦礫となっている家々、外目には全く損傷がなく陸の上に佇んでいるように見える船。キャンパスに張り付いてしまった全く動きのないような風景を、本当に実生活の風景に戻すことができるのだろうか。傍らで、車を止めて写真を取っている人々は、一体何を記録に残しておきたいのだろうか。由利にとっては、被写体に収めるということが想像できない光景であった。

唐桑半島に入ると、まずは緑一杯の景色が広がった。自然は、何もなかったように佇んでいる。地震や津波も自然現象。そこで育つ緑も自然のものであり、自然の中には人間が計り知れない調和というものがあるのかもしれない。唐桑半島の中も、海辺の集落はことごとく破壊されていた。仮設住宅も整備されてきていたが、初めてみる仮設住宅には全く生活感が感じられない。ここに住む人々が、早く普通の生活に戻れることを祈らずにはいられない。そうこうしているうちに、ボランティア・センターに到着し、一通りの手続きを済ませ、雑魚寝ながらこれから一週間生活するスペースを確保した。

## 第 11 章 ボランティア開始

由利にとって、初めてのボランティア活動である。それは、初日の夜のミーティングから始まった。明日の作業内容の説明と現場のリーダーの選出、注意事項が説明されて解散となる。明日は、民家の瓦礫撤去とのことであった。長旅、ロング・ドライブもあって、まだ夜の 8 時台であったが眠ることとした。そもそも、雑魚寝の場所には明かりもなく、懐中電灯だけなので、本を読むこともできない。とにかく体を休める、これがボランティアの基本なのかもしれない。

ここのボランティア・センターでは、御飯だけは用意してくれている。といっても、持ち回りで準備することは必要であるが。後は、レトルトや持ち込んだ料理等で食事を済ませる。由利は、御飯にふりかけで初日の朝食を済ませ、昼食用の握り飯を作成して、いざ、現場に出陣である。今日のリーダーは、「たっちゃん」という人で、まだ学生であるが、すでに 1 週間ほどボランティアを行っており経験は十分である。その他、10 名ほどで瓦礫の撤去を始める。この家は、おばあちゃんが 1 人で暮らしていたようで、重機による瓦礫の撤去が行われる前に家の中や周りの瓦礫を運び出しておく必要があった。この家はいずれ解体することになるのであるが、その前に瓦礫を整理しておくことが必要らしい。瓦礫の量は半端ではない。家の中の不要なものから、外から流されてきたもの、瓦や畳、はたまた、ブロック塀まで流れ込んできている。ボランティアの人数戦術が一番効果を発揮するところである。ボランティアは、決して自分中心に判断してはいけない。ゴミと思われるものでも、その家の人にとっては貴重な宝物だったりする。何を撤去してほしいかは、都度確認して進めることになる。それと、あまり無理はせずに、適度に休憩を取りながら作業することが重要である。とにかく、人に迷惑を掛けないということに徹するのが良い。



ブロック塀は破壊して運ぶことになる。ここは元職人の「がんさん」の出番である。大きな金づちでブロック塀を破壊していく姿は、無理に力を入れているわけではなく、振り子のように回転させながら見事にブロック塀にあてていく。「由利君、君もやりなよ」と言われて、おもむろにゴーグルをかけて金づちを手にする。力いっぱい振り上げてからブロック塀目がけて振り下ろした。そこで、「がんさん」からひと言。「そんなに力一杯振り上げたら、5回もやれば疲れ切るぞ！金づちの重さに任せるんだ。重さを利用して円を描くように振り上げれば、自然と回転し打ちおろせるもんだ」。なるほど、無理に力を入れずに重さに任せて振ると自然と回転してくれるものだ、と由利は感心した。

昼食時間になり、朝作って持ってきた握り飯を食べながら「たっちゃん」と話す機会があった。「たっちゃん」は、大学を休んでボランティアに来ている。特にボランティア休暇が認められているわけではなく、また、ボランティアに行くことで単位の足しになるわけではない。でも、「たっちゃん」としては、学生時代のこの時期にこのような震災に巡り合ったことは天が与えてくれた機会と考えていた。彼は大阪から来ていて、阪神大震災の時は、まだ小さかったこともあるが、テレビを見ていて何もできなかったことが歯がゆかったということ覚えていた。今回は、直接現地で活動し、被災者の気持ちというものを一つでも多く学びたいとのことだった。由利は、以前から中学生以上の学生にはボランティア活動を義務付け、実際の活動を通していろいろなことを学ぶべきだと考えていたので、それを自発的にやっている「たっちゃん」をすばらしいと思った。さらに、今日のリーダーとしての活躍は、今後の生活に生きていくのではないかと感じた。今回の震災では多くの学生のボランティアが活動しているということも聞く。多くの若い人たちが、この現実を直に見て、直接被災者と一緒に活動して、同じ目的をもったボランティアの人と意見交換することは、非常に有意義だと由利も思った。

午後3時頃には作業が終了し、撤収。機材を片付けたあと、みんなで銭湯に行くことになった。埃まみれ、汗まみれの体を洗い流し、さっぱりすることができた。なぜか、「がんさん」は銭湯にいかなかった。由利は、気楽な気持ちで「がんさん、銭湯いかないのですか？さっぱりしますよ！」と言ったところ、「被災者は満足に風呂に入ったりすることも、食事をしたりすることすらできないんですよ。僕は、ボランティアに来ている間は、被災者と同じ気持ちで活動すべきだと思うんだ。だから風呂にはいかない。体は拭けば大丈夫。」とのことだった。由利は、そこまでストイックにボランティアする必要があるのだろうかと考えた。また、自分としては、風呂でも入ってすっきりした気持ちで明日のボランティアに向かう方が、被災者にとってもありがたいはずだ、とも考えた。ま、色々な考え方があるけど、同じ目的で集まって活動するというのも面白いものだと思う。

無事、初日の作業を終え、夕食も済ませ、夜のミーティングに入った。明日は、津波で浸水した家の泥出しとのことだった。明日もガテン系のタフな作業になりそうだが、1杯だけ缶ビールを飲んで、すっきりして寝ることにした。もちろん、「がんさん」はアルコールを飲むなんてことは絶対にしなかった。

## 第 12 章 小さな集落の悲しさ

2 日目は、小浜という小さな漁村の民家の泥だしである。この地域は、海から続く川に沿った谷合の集落で、津波が川を遡るようにしてやってきて、川に沿った集落をすべて飲み込んでいったところである。今日ボランティアする民家は、その中で一番上流にある家で、欄間などを備えた立派な造りの家である。一番上流にあったため、津波の浸水は受けたが、家が破壊されるにはいたっていなかったため、再建できることになった。見渡せば、周りのすべての民家が瓦礫となっており、家として立っていたのはこの民家と隣の家くらいであった。

この家の息子と大工さんで、使えなくなった壁をはがしたりしている中を、ボランティア 20 名が入って泥出しを行った。あらかじめ根太をはずしてあったので作業はやり易い。泥も 3 か月も経っているため適度に乾いており、それほど重くはなかったが、それでも一斗缶一杯の泥を持ちあげるのはかなりきつい。震災直後の泥出しはさぞ大変だったろうと思わざるをえない。「ボランティアは無理してはいけない」という昨日の教訓から、缶一杯に泥を入れる必要はない、あくまで、継続して作業が行える量でやれば良いということに気付いた。由利もそれなりにボランティア活動に慣れてきたということである。

休憩時間に、息子さんから色々と震災の話聞くことができた。このような小さな集落は、どうしても置き去りにされたようである。ここに自衛隊が来たのは 1 週間も経ってからだったそうで、それまでに地元の消防団が、地元にあった重機を用いて瓦礫を移動させ、道路を確保し、遺体を見つけて安置するということを進めたとのこと。自衛隊が来た時には、道路は確保され、救援物資も搬送でき、ボランティアも活動できる状況になっていたとのことであった。その上、自衛隊は 1 日 5 千円くらいの追加手当が出るようだが、地元の消防団は何も出ないということで、自衛隊に対しては不満たらたらであった。津波のパワーは本当にものすごいうで、川を完全に埋めてしまったらしい。本来は、それなりの川幅を持っていて、山女などがいたようであるが、津波でほとんど埋まってしまっていた。川の瓦礫片付けの作業も進んでおり、いずれ元の川に戻るだろうとのことであった。そうそう、忘れていたが本日のリーダーは、てつやさんという人で、普段は自然と親しむ NPO の活動をしているらしい。今回、NPO から派遣されてボランティアに参加しているということで、ボランティア自体はお手のものである。わりとおっとりした性格であり、敵は作らないタイプだなあ〜という感じである。山女の話になると俄然盛り上がってきて、息子さんとの釣り談義に花を咲かせていた。が、いずれ元の川が戻ったら、山女も戻ってくると言った息子さんに対して、「どこから来るのだろう」という妙な突っ込みを入れ全員の思考を停止させた。天然系のところもあるのだが、そこから出てくる発言には、鋭い部分もある。でも、そこにいた全員が、「必ず山女は戻ってくる」と確信を持っていたことは間違いない。いつか、必ず豊かな川が戻る、と由利も感じた。

ふと山の方を眺めると、ちょっと上の方にちっちゃな神社のようなものがあり、そこまでは津波も上がっていなかったことが分かった。鎮守の森というのは、やはり先人の知恵であるということに改めて感じた。

途中からは、息子さんも加わっての泥だしで、さすがに体がでかいし力もあるのであつという間に泥の入った缶を運び去ってしまった。これにはボランティアは敵わない。泥出しから柱、欄間の清掃、床下吸気口の清掃など一通り済ませて活動終了。終わりの挨拶をすると、息子さんから本当に助かりましたというお礼の言葉。てつやさんは、感動家なのでこういう言葉に非常に弱い。由利も、この3か月間、ずっと震災の後片付けに翻弄されてきた人の言葉には、妙に力強さと優しさを感じられた。「苦しみ（悲しみだったかな？）の数だけ優しくなれる」という、どこかの歌詞は本当なんだなあ、と満足を感じて帰った。

### 第13章 牡蠣棚用の丸太運び

3日目は、牡蠣棚に使う杉の丸太を杉林の中から海岸に運ぶ作業である。足場の悪い山の斜面の作業であり、丸太自体は長く重いので、素人のボランティアがやれる作業なのだろうかと思っていたが、そこは人が集まればそれなりの知識のある人がいるものである。今日のリーダー兼主役は誠治さんである。1本の丸太を6~7人で担ぎ、立ち木の間をうまく抜け、早さをコントロールしながら運ぶには、リーダーシップが命である。場合によっては、木に挟まれたり、丸太の下敷きになったりで大怪我になりかねない。無理せず慎重に進める作業である。最終的には、必要となる30本近い丸太を運び出して、海から船に乗り込ませることができた。今まで以上に緊張する作業ではあった。

ところで、由利にとっては、最初ちょっと疑問の残る作業であった。「これって、牡蠣養殖の営業支援だね。ほんとにボランティアの仕事？営利目的の活動をボランティアが支援するの？」という疑問である。「ごちゃごちゃ細かいこと考えんじゃねーよ！俺たちや、被災者の要望にはなんだってやりゃいいんだ。どうせやることは山のようにあるんだから、できるところから順番に片づけてぎゃ〜いいんだ！」と誠治さん。「ま、余計なことは考えずにボランティアに専念だ！」ということで、由利も割り切って作業を進めた。

すべての作業が終了して、例によって依頼主の牡蠣養殖屋さんからお礼の言葉の時間になる。「本日はありがとうございました。大変助かりました。本来であれば、重機を使って運び出すのですが、このご時世、すべて出払っております。ボランティアの皆さんがいなかったら、いつ運び出しができたかわかりません。感謝の気持ちで一杯です」。由利は、特に感動もなく聞いていたが、続く言葉に「ドキッ」とさせられた。「この地域の牡蠣の養殖はいつ再開できるか分からない状況でした。ほとんどの養殖業者は、国からの補助を待ってから開始するということでして、それじゃ今年の種付けは絶望的です。私たちも、国からの補助が欲しいのは当然ですが、何とかして今年の種付けを開始して、2年後に牡蠣が出荷できるようにしたいと思っていました。そのためには、自力でも丸太の切り出し、筏作り、牡蠣の種付けを進めなければならないが、重機もなく途方に暮れていたところでした。そのため、ボランティアの皆さんの力にお願いすることとしました。なんとか、この伝統を継承して立派な牡蠣を育てていきたいと思っています。ボランティアの皆さんのお力添えに報いるためにも。2年後、牡蠣ができたら、好きなだけ牡蠣を食べてくだ

さい。」

夜のミーティングで、明日の作業の段取りが決められ、その後はお疲れさまということで 1 杯のビールを飲んだ。そこで、由利は、「みさちゃん」と話す機会ができた。「みさちゃん」は、本当に明るく前向きにボランティアに取り込む子で、みんなの元気の源である。多少疲れてきても、彼女の一言で元気がでる人も多かった。「みさちゃん」は、ここにボランティアに来て、もうすでに 3 週間ほど活動をしているとのこと。ずいぶんとボランティアに熱心なんだなあ~と由利は思っていた。

「みさちゃんは、普段は別のボランティア活動でもしてるの？」と由利は、切り出した。

「そう。1 年くらい前からボランティア活動を始めてます。子供学校とか行ったりとかしてやっています」。

由利が、「そうなんだ。楽しそうだし、なんか充実しているようでいいですね」というと、みさちゃんは、ちょっと暗い表情を見せて、ぼつぼつと話し始めた。

「私、元は引きこもりだったんですよ。」由利は、突然の話にちょっと戸惑って、みさちゃんが続ける話を頷きながら聞いていた。

「高校の時、いじめにあってね。学校もあまり行かなくて、やっとの思いで卒業だけはできたんだけどね。その後も、特に何もせず家にいたんですよ。なんか何も信じられなくてね。親からは、いろいろと仕事のことも言われて、面接とかも行っただけど、人を見ると信じられなくて、ほとんどこちらから断ってしまった。そうこうしているうちにボランティア学校がテレビで紹介されていて、私子供は好きだからちょっと興味がわいて初めてみたというのがきっかけでした。子供って良いですよ、ストレートで裏がなくて。それに、ボランティアに集まっている人も裏がなくて、みんなストレートに言うし。そういうのって、現実社会ではないな、って思って。そこに、今回の震災でしよう。これは絶対に行かなきゃ、と思って思い切って参加しちゃったんですよ。ここにいつまでいるか、まだ決めていないけど、こういうところって落ち着くよね。みんなが同じ目標を持って、一心不乱に活動するってのが私には合ってるな、って感じです」。

由利は、何も言えなかったが、自分のことを「引きこもりだった」と素直に言えるようになった。「みさちゃん」は、これから現実社会に入っても大丈夫なんじゃないかなと思った。

## 第 14 章 どこまでやるのがボランティア

4 日目の作業は家具の運び出しである。70 歳くらいの夫婦で暮らしていた家も、津波で一階部分がほとんど水につかってしまった。幸い、道路の盛り土に遮られて津波が直接来なかったため、家は壊されずに立っていた。そのため、改修すれば再び住むことができるようになるようである。隣には、避難所も兼ねている小学校があり、あの震災の中では落ち着いた雰囲気の集落であった。3 か月もたってしまっていたのは、行政が家の工事を禁止していたためである。この地区全体の行政区画を考えていたらしいが、2 か月ほどたった時、突然、解除になったとのことである。ここにも、行政に振り回された人々がいた。ご夫婦は、仕方がないので自分たちで片付けを始めて

いたが、すでに限界で疲れ切っていたようで、ボランティアに要請が来た。

作業自体は、家具を納屋に運び出す作業である。ご夫婦は、傷ついてもいいから気にせずに運び出してくださいとおっしゃっていたが、そこはボランティア。まるで、引越し屋さんのようにきれいに運び出しを行った。ガテン系から、引越しの梱包のプロまで揃っている男性陣。女性陣は、箆笥の中身を、これもきれいに取り出して、運び出した後にまたきれいに戻していた。今日の作業は、ボランティアが得意とする作業である。その後、家の前の側溝の泥出しを行って、まわりをきれいに盛装して本日の作業は終了した。

作業自体は、午後 2 時頃には終わり、由利はお風呂に行くかと思っていたところ、本日のリーダーである「とくさん」がご夫婦に対して、なにか他にお手伝いすることはありますか、と切り出した。お二人は、ちょっと考えてから、「大丈夫です。みなさんには本当にお世話になりました」と言われた。「とくさん」は、「私たちまだ十分時間がありますから、なんでもやりますよ。ほかになにかありませんか？」とさらに聞いたが、お二人は、「大丈夫です。本当にありがとうございました」とのことで、この日の作業は終了することとなった。別れ側に、ボランティアの車を見送るご夫婦は、笑顔でずっと見送ってくれた。

ということで、早く終わったので、今日は温泉のあるホテルに行くこととした。このホテルでは、ボランティア向けに温泉を提供してくれている。ちょっと塩辛い温泉で、本当に疲れを癒すことができた。実はこのホテルは、由利が昨年泊まった気仙沼のホテルで、お寿司やの大寿司さんが予約してくれたところで、ここは高台にあるため津波の被害にも遭わずに済んだ。温泉から出て、フロントの人に話を聞くと、大寿司さんは店は流されてしまったが、無事だとのことだった。魚屋の魚新さんは、店は壊れてしまったが、3 階建ての 3 階を修理して済んでいるということで、こちらでも無事なことがわかって本当に安心した。

食事を済ませて、夜のミーティングが始まったが、今日のミーティングはいつもと様子が違い、さながら今日の反省会となってしまった。まず、「とくさん」が、「本日の作業で、早くおわりにして温泉に行きたいと言っていた人がいるが、ボランティアとしてできるだけ多くのことをやってあげるべきで、早く帰って温泉に行きたいというのはおかしい」と切り出した。

由利は、「俺のことか」とちょっと思ったが、誰に言ったわけでもないの、とりあえず静観していた。すると、いつもはノホホンとしていた「りんちゃん」が、「温泉に行こうというのは、早く終わったので温泉に行こうと言ったわけで、温泉に行くために早く終わりたいと言ったわけではない」とちょっと厳しい口調で言った。おそらく、ミーティングの前にもそれなりの話がやられていたのだろう。それに対して「そもそも早く終わるという考え自体がおかしい。被災者のために目一杯はたらくのがボランティアでしょう」ととくさんがいうと、「精一杯働いているのは、ボランティア全員同じです。早く終わるからと言って、むりやり仕事を見つけようとする方がおかしい。その日予定していた作業が終わったのであれば、速やかに撤退すべきでしょう」と、りんちゃんが反論した。すると、とくさんは、「被災者は、遠慮しているから、こちらからなにかできることがあるかを聞いてやるべきだ。限られた時間でボランティアに来ているわけだから、貴重な時間を目一杯使って被災者のための活動をすべきだ」とさらに続けた。りんちゃんも、「被

災者だって、ボランティアを受け入れることはそれなりの負担のはず。依頼されたことを済ませたら、とっとと撤収するのが被災者にも負担を掛けないですむ」と切り返した。

由利は、じっと二人のやりとりを聞いていた。これは結論の出ない話だろう。どちらも、被災者のためにどこまで役に立てるかを真剣に考えたことから出てくる意見だ。被災者のことを思って、ここまで熱く議論できることをうらやましく思った。合わせて、りんちゃんの意見のように、被災者がボランティアを受け入れることは、それなりの負担を掛けていることは正しいと思った。ボランティアを頼まないで済めばどれだけ楽か。今日の別れ際のご夫婦の笑顔、これは、ボランティアをやってくれたことに対する感謝の気持ちと、家の片付けが進んだことに対する安心感、さらに、これからは2人で進められるし他人が入ってくることもないという安堵感が入り混じったものではないだろうかと思利は思った。

## 第15章 ボランティア最終日

本日の作業は、牡蠣筏の組み上げである。今日で、由利のボランティアも最終日である。「百里を行く者は九十を半ばとす」という諺通り、再駒でボランティアをやり遂げようと心に誓うとともに、最後まで迷惑を掛けないようにしようと肝に銘じて作業に取り掛かる。男性陣は、筏組、女性陣は牡蠣の種付けを行い、2年後に大きく育つことを記念しての作業が続いた。今日からは、甘利さんという元大学教授が加わった。どう見ても60代後半であるこの老人が、本当にボランティア、しかも筏組みのようなガテン系の作業ができるのだろうか、と由利は思ったが、どうしてどうして。周りをガンガン引っ張って作業を進める姿は堂に入ったものである。「甘利先生、すごいですね!」と由利が言うと、「君達よりは、アウトドアには慣れているよ!」と軽くあしらわれてしまった。聞くところによると、研究のため世界中のあちらこちらに行っては、金づちで岩を砕いていたとのこと。学生と一緒にテントで生活することもたびたびやっていたとのこと。丸太を組んでいく時の釘打ちはお手のものであった。

2つの牡蠣筏を組み上げて、本日の作業は終了。一休みしながら、漁師（といっても、ここの牡蠣の養殖業者の専務であるが）の話を聞いていた。「地震直後は、命よりも大切な船を守るため、船を沖に出そうと懸命に走らせていた。でも、いつもとどうも様子が違うと思っていたと、とんでもなく海が盛り上がってくるのが分かった。『こりゃ、大変だ!』と思ったが、一か八か、とにかく津波を超えるべく船を全速力で走らせたが、津波の威力の前にはまさに木の葉状態。くるくる回りながら、津波に流されてしまった。その中で、1筋の流れが岸に向かってるのが見えたため、これも一か八か、泳いで岸に向かうことにして、かろうじて助かった。」とのことであった。「その後、家に戻ってみると、あたり一面、集落全体が破壊されてしまっていた」。さらっと言ってしまうところは、さすがに海の男の強さなんだろうな、と由利は思ったが、そんな単純なことではない。やはり、苦しみを乗り越えて、ここまでやってきた人というものは、経験談を語るにしても優しく語れるものなのだなあ、と思った。

「すべて終わった！」。由利は、銭湯の中で、この 5 日間のボランティア生活の余韻に浸っていた。満足感や達成感というよりは、無事に終えることができたこと、少なくとも自分が感じている限りでは誰にも迷惑をかけなかった、という安堵感で一杯である。ここのボランティアセンターでは、帰る前の最後のミーティングで感想を述べることになっている。ほとんどの人が、「依頼主の感謝のことばや笑顔を見るとボランティアをやって良かったと思う」と言っていることに對して、由利はずっと若干の違和感を感じていた。本当に感謝されているのか、本当の笑顔なのかどうか、ずっと心の中に引っかかっていた。ボランティアを頼まなければどうしようもない状況に追い込まれていたのは確かである。自分たちではどうしようもない。行政には頼れない状況で、ボランティアが活動してくれたことに対して、確かに感謝の気持ちで一杯であったであろう。反面、やはり、見知らぬ人を受け入れることに関しては、不安や負担が大きかったに違いない。ボランティアを送り出す時の笑顔は、感謝の気持ちとともに安堵の気持ちでもあったのではないだろうか。また、由利にとっては 5 日で終わる活動である。しかし、被災者にとっては、いつまで続くのかが分からない困難な生活である。「安堵」、これで良いのではないかと由利は思った。ボランティアは、自分が行ったことに対して決して見返りや感謝を求めてはならない。これは、由利が出発前に固く誓ったことであったし、様々なボランティア・サイトでも語られていることである。「安堵」、これが、今回のボランティアで求めているものであり、これを感じることができたことで、3・11 以来もやもやとしていた心が晴れたといえるのではないか。由利は、そう思って湯船を後にした。

## 第 16 章 JAP 再び

由利にとっての最後のミーティングが始まった。当然のことながら、由利には明日の活動の割り当てはない。残って活動が続けられるボランティアの人に「頑張ってください」という言葉を残すのみであった。

ミーティング後の恒例の簡単な飲み会で、由利は甘利先生から大きな、しかし、タダの授業を受けることとなった。それは、今回の震災のもう 1 つのとてつもなく大きな問題の原発についてである。

「甘利先生は、どのような研究をされていたのですか？」と由利が尋ねると、  
「地球科学といってね、地球の生い立ちや構造、構成というものを研究するものなんだ。おかげで、世界中色々なところに行ったよ！」

「地球科学って、地震を予知したりするやつですか？」と、由利はなんとか話を合わせようとしたが、「いやいや、それは、地球物理学だよ」と先生に言われてしまい、むなしい努力に終わった。まあ～いいか、畑違いだし、と由利は思ったが、甘利先生から別の話を振られてきた。

「君は、これに賛同してくれるかね？」と先生が 1 枚の紙を出してきた。由利は、一体なんだろうと思って見てみると、「9 月 18 日、原発反対 1000 万人署名活動」と書かれてあった。由利は、変な話に巻き込まれたくないなあ～と思って、「あ、それはインターネットで既に署名しま

した」と適当に答えることにした。由利も、3・11以来の福島原発の水素爆発以来、原子力や放射能については、いろいろとかじってはいたが、原発が必要か不要かという話に関しては、どうもイデオロギー的な印象を持っていて、まだ判断がついていなかった。

甘利先生は、「そうか、すでに賛同してくれていたか。それなら OK だ。」と言って、さらに話を続けた。

「君は、原発をどう思う？」と先生の直球の質問に対して、由利は「原発は危険性が高いが、止めるべきかどうかについては、電力供給、原子力関連の雇用、地域住民の生活などを含めて総合的に考える必要があると思いますが」と答えた。相手は元大学教授だし、迂闊なことを言うのは危険だと思っただけの意見であったが、その時の由利は、原発をどうすべきかという確固とした考え方は持っていなかった。

甘利先生は、「ふふっ」と軽く笑うだけであった。

「いいか、由利くん、原子力というのはだな、まだ未完成の科学技術なんだ。まだ、人間が自由に扱えるものじゃない。さらに悪いことに、こいつは扱いを間違えるとコントロールが利かなくなってしまうものなんだ。そんなものを、経済性重視で商用に使っているのが原発なんだ。今回、コントロールが利かなくなった場合どうなるかというのを明らかにしたのが福島原発なんだ。」と先生は続けた。由利も、それは知っている、と思ったが、頷きながら先生の話聞いた。

「由利くん、君はなんで福島があんなことになったと思うかね？」という先生の言葉に対して、ここは由利も持っている知識をフル稼働させて、「え〜と、地震が発生した後、原子炉自体は緊急停止したが、その後に発生した想定外の巨大な津波によって、すべての電源が使用できなくなり、そのために原子炉自体がメルトダウンを起こしてしまった。また、それによっても発生した水素により、水素爆発を起こし、建物自体が壊れるとともに、大量の放射能物質をまき散らしてしまった、というふうに理解していますが…」と答えた。先生は、また、「ふふっ」と軽く笑い、次のように続けた。「恐ろしいもんだ、情報隠ぺいとマスコミの世論操作というものは。日本人は、中国のことを信用できない国と言うけれども、日本の方がはるかにひどい状況だよ」。「え、どういうことですか？」と、由利は予想外の先生の言葉に困惑してしまった。

「由利君、東京電力や政府が、今一番恐れているのはなんだと思う？」。由利は、「恐れていることですか？ う〜ん、今以上に被害が広がってしまうことですか？」と答えた。先生は、「それは、誰しも願っていることだけど、そうじゃなくて、東京電力や政府が恐れているのは地震で原発が壊れていたということが明らかになることだよ。これだけは何とでも阻止し、想定外の津波による事故ということにしたいんだ。そのためには、どのような隠ぺいも情報操作をするだろう。もし、地震の段階ですでに原子炉や配管等が破壊されていて、冷却自体がうまくいかなくなっていた、あるいは、原子炉そのものが壊れてメルトダウンのようなことが起こっていたということになったら、そりゃ、東京電力や政府にとっては死活問題さ。なんたって、日本はどこでも大地震の起こる可能性があるわけで、それは原発が立っているところも同じなんだ。福島が、もしこの程度の地震で壊れていたとなると、日本中の原発の耐震性というものが崩されてしまう。それだけは、絶対に避けたいのさ。さらに、東京電力も『異常な震災』ということで免責を主張したい



わけだ。そのためには、耐震は十分であったが想定をはるかに超える津波ということにしたいわけだ」と言った。さらに、「私もまだ詳しくはわからんがね、多少なりとも東京電力から出てきている情報を解析している友達の話では、データの地震では壊れていないというのはおかしい」と言い始めている。真相がわかるのはまだまだ先になると思うが、いかにせん情報が出てきていない。原発ほどの設備で、情報がないわけがないので、隠ぺいされているとしか考えようがない。つじつまの合いそうな情報だけが出てきているわけだ」。由利は、おそろしいくらいの闇の世界があることを感じた。さらに、甘利先生は話を続けた。「放射性物質がどの程度飛散しているかの情報もまったく出てきていない。SPEEDI という世界にも誇れるシステムがあるのに、その情報が公開されない。由利君、これどう思う？おかしくないか？」。由利は、これについては前から気になっていたというか憤りすら感じていた。「そうなんですよ。できるだけ細かく、正確にモニタリングして、住民に迅速に伝えるべきで、それを行っていないのは犯罪ですよ。どれだけの人が、何も知らずに被爆しているか。この前のニュースでは、福島の子供の尿から放射性物質が検出されたと言ってましたよね。これって、内部被ばくしてるってことじゃないんですか」。「そうなんだよ、由利君。この前の政府の発表では、公開することにより住民がパニックになり余計な混乱を招かないようにした、とか言ってたけど、そんなの言い訳だよ。後になって、被ばくしてましたって言われた住民はどうすりゃいいんだ。住民だって、正確な情報があれば、なんらかの手だては取れたはずだ。住民を勝手に被ばくさせておいて、なにが国民の命を預かる政府なんだってことだよ」。先生も若干興奮しながら話を進めていた。多少お酒が入ってきているのもあるかもしれないが、先生としても断固とした決意のようなものがあって言っているという感じであった。

「甘利先生、ところで先生が最初におっしゃられていた『原子力はまだ未完成の科学技術』というのはどういうことなんですか？」。由利も、原子力というものをもっと詳しく知りたいと思うようになっていた。

「いいか、まず一番でかいのは、放射能というものを処理する方法を、人類はまだ見つけていないんだ。つまり、放射性物質が放射能を出し続ける限り、人間ができることは閉じ込めておくということだけなんだ。ところが、放射性物質によっては、何百年も何千年も、ひどいものでは何十万年も放射線を出し続けるものなんだ。どうやって、こんなに長い間閉じ込め続けることができるのだ。そりゃ、理論的には可能さ。閉じ込めておいて、それを地中深く埋めておけばよいだろう。だけど、現実はどうなんだろう。いいか、由利君、私は歴史は良く知らんが、これだけの長い期間、同じ言葉で同じ意思を伝え続けることが可能と思うか？地球だって変動する。それだけの長い間、安定して閉じ込めることが可能と思うか？そういうものなんだよ、放射性物質というものは。人類が、放射能や放射線というものを処理できるようにならない限り、使っちゃいけないものなんだよ」。「それって、コスモクリーナーのことですよ」不謹慎にも、由利はこんなことを言ってしまった。先生はちょっと微笑んで、「あー、そういえば昔、私のゼミでもはやっていたなあ。宇宙戦艦ヤマト。私も見たけど、なかなかはまったね。そうだな、コスモクリーナーでもあれば、原子力の平和利用というのも成り立つかもしれないな」。由利は、言っ

てしまったことにちょっと後悔したが、話を元に戻すことにした。「でも先生、現在でも放射性物質はきちんと安全に管理されているのですよね。それであれば、その処理方法は将来の世代に委ねることもできるのではないですか」と言った。先生は、「安全に管理か…。由利君、日本の原発から出てくる使用済み核燃料がどのように扱われているかを知っているかい？使用済み核燃料は、まさに放射性物質だよね」。「すいません、良く知りませんが、どこかで安全に管理されているのではないですか」と由利は答えた。先生は、「細かい話はしないけど、青森県の六ヶ所村に一時保管されているか、あるいは、それぞれの原発の中に保管されているんだ。今回、福島でも問題になった、使用済み核燃料が保存されているプールのように、これって安全に保管されているっていいのかい？原発の安全性と使用済み核燃料の安全な保管、どちらも人類は答えを出していない状況で未完成のものを使い続けているわけだ。本当にこれで良いのか？」。

「でも、先生、地球温暖化のための CO2 抑制というのもあるので、原子力は一概に経済性だけで議論されているのではないと思いますが」と、由利は質問した。すると先生は、「確かに原子力は CO2 は出さない。だがな、由利君、原子力発電所がどれだけの熱を海に捨てているかを知っているかい？私も専門ではないが、発電に使っている熱は、原子力発電で作られだされる熱のうちの 1/3 程度なんだ。残りの 2/3 は、原子力発電の冷却用に使われている海水によって海に放出してしまっているんだ。だから、原子力は CO2 を出さないから地球温暖化対策になるというのは詭弁で、海水温の上昇を招いているということで地球温暖化に影響を与えているんだ。確かに、君の言うように地球温暖化についても待ったなしで考えなければいけない。今、原子力発電を止めたら、その分を化石燃料で賄わなければならないだろう。再生可能エネルギーがほんとうに立ち上がるまでは、まだ時間がかかるだろう。由利君、私は思うんだ。しばらく辛いかもしれないが、国民が全員節電に励み、なんとか不足分の 30%程度を補うように努力しようじゃないか。精神論にするつもりはないが、ちょっと贅沢を我慢すればできるはずだよ。それと大切なのは、原子力発電の既得権を断ち切って、送電と発電を分離させることを早急に実現すべきだ。僕はね、孫正義さんのメガソーラ計画には大賛成なんだ。巷では、孫さんが新たなビジネスで儲けようとしていると批判している人がいるようだが、それでも良いじゃないか。彼が、インターネットに参入して ADSL を当時としては破格の値段で提供したことで、今の日本の高速インターネット環境ができたわけだ。これが出てくるまでは、日本は韓国からも大きく引き離されたインターネット環境だったんだ。それが今ではおそらく世界で一番快適で安価なインターネット環境が提供されているんじゃないか。メガソーラで、孫さんがどれだけ儲けるのかは知らんが、これで原子力発電が止められる可能性があるなら大いに応援しようじゃないか」。

先生の話は、さらに生態系の方に進んでいった。「放射性物質というのは、今言ったように相当長い間放射線を出し続けて、しかも、長い間無くならないんだ。これはどういうことかということ、一度外に出てしまった放射性物質は、相当の長い間、生態系のどこかに存在し続けることになるんだ。たとえば、海に流れ出た放射性物質をプランクトンが食べ、それを魚が食べ、さらに大きな魚が食べ、そうこうしているうちに人間がその魚を食べる。それが、再び大地や河川から海に流れ、また、プランクトンが食べる、ということが起こるんだ。まさにエコロジー全体に渡って

放射性物質が含まれることになり、日本中、いや、世界中が放射性物質に汚染されることになってしまうんだ。その中で、人間の体内に入った放射性物質により、それが体内に留まっている間ずっと放射線を浴び続けることになるんだ。最悪だろう、これって」。由利は、背筋が寒くなるのを感じた。放射能ってそんなに恐ろしいものなんだ。

その後、さらに色々と放射能に関する話が続いた上で、甘利先生はうつすらと涙を浮かべながら次のように語った。「由利君、日本は明治維新以来、強い国を目指して軍事大国化を図ったが、その結果として、太平洋戦争ですべてを失った。戦後は、アメリカに守られ、というか、冷戦のおかげで、経済優先で進んできて、原子力発電所もその電力供給を補うべく推進されてきた。今回の福島のことが起こって、戦後の経済発展のつけとして、もう一度すべてを失うことになりはしないかと思うんだ。太平洋戦争では、真珠湾の奇襲攻撃により、世界から JAP 呼ばわりされた。戦後、平和主義のもと、ある程度の世界的な信頼を勝ち取ってきたが、今回の福島、特に海への放射能汚染水の投棄や放射性物質の放出により、再度世界から JAP 呼ばわりされることになってしまうのではないかと思う。『JAP 再び』なんてことになったら、我々は将来の子供たちや子孫に対して大きな負の遺産を残すことになるんだ。多少とも我々が償えることは、今すべての原発を止め、世界に対して『真の原子力のない世界』を作っていくことじゃないかなと思う。小さな国になってもいいじゃないか、それよりも、世界に胸を張れる国にしたいと思わないか」。由利は、本当に実のある話を聞くことができてグッときた。今回ボランティアに来たのも、何か直接的な行動を取らなければということだった。原子力に対しても、何か直接的な行動を取っていかねばならないと思った。ちょうど消灯の時間となり、由利は、甘利先生に貴重なお話をしていただいたことに感謝の気持ちを述べて、最後の雑魚寝の場所に向かった。

## 第 17 章 そしてボランティアともお別れ

翌朝、荷物をまとめ、朝食を食べ終わってからボランティア・センターを後にした。1 週間も共同生活を行っていると、それなりに仲間意識も芽生え、車に乗り込むとほとんど全員が見送りに来てくれた。「気を付けて帰ってください」、「今日のボランティアも頑張ってたね」、「また一緒にやれる日を楽しみにしています」という挨拶が交互に交わされ、ボランティア・センターを後にした。津波に呑み込まれた集落、壊れた家、仮設住宅などを後にし、気仙沼の街並みを遠くに見ながら運転する。今日中に帰れば良いから、焦ることもなくゆったりした気持ちで運転した。気仙沼を後にすると、そこからは地震の爪痕すら感じない、普段通りと思われる生活をしている集落を抜ける。途中、道の駅で野菜と米を買った。これも、去年、気仙沼に来た時に買って帰った地元の米で、まさか本当に買うことになるとは想像だにしていなかった。

「ボランティアを終えたら、ちょっと観光でもしてリフレッシュしてから日常生活に戻った方が良い」という進言をあり、一関から平泉に向かうこととした。たしかに、ボランティアの間は、すべての生活を切り詰め、被災者のためという 1 つの気持ちだけで過ごしてきたため、現実社会に戻るためには多少気晴らしをした方が良くように思えた。去年、平泉に行った時に最も感動

した場所の「高館義経堂」に行って、その後、蕎麦でも食べて帰ろう。ということで、車を走らせた。結構道は覚えているものである。ナビがなくても、平泉の駅前を抜け、線路を越えて「高館義経堂」の駐車場に車を入れる。ちょっと風景が違ったのは、去年はもう 1 本先の坂道から入ったためであった。そこから、階段を上り、受付でお金を払ってさらに階段を上る。この階段を上りきったところで大きく視界が広がり、素晴らしい景色が見えるはずである。去年は秋であったが、今年は初夏。本当の「夏草や...」が見られるはずである、と思って階段を上って行った。やがて、階段を登り切ると、目の前に滔々と流れる北上川、その先に青々と広がる田園風景から、そのまま山並みにつながる景色が広がる。ゆるやかに広がる山の稜線が、眼下の景色をやわらかく包み込んでいる。前に見た時には、左側に広がる高速道路がちょっと邪魔な感じがしたが、夏の木々が生い茂っている風景からは、高速道路の緩やかな曲線も、それなりに景色にマッチしているように感じられた。期待通りの景色。「夏草や 兵どもが 夢の跡」。やはり、ここは平泉で一番好きな場所であった。「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり」。なぜか、奥の細道の冒頭の句が浮かんできた。いつもなら、「三代の栄耀...」となるはずが、今日は冒頭の句になったのはなぜだろう。今回のボランティア活動を終えたことで、新たな道に由利を誘うものなのかもしれない。

「高館義経堂」を下り、受付のおじさんに、おいしい蕎麦屋を尋ねると、その先の道の右側にある長寿庵が賑わっているとのこと。賛否両論あるようだが、きっと美味しいに違いないと由利は思った。由利が長寿庵に着くと、残念ながら扉に張り紙がしてあり、「体調がすぐれないため、しばらく休業します」とのこと。しょうがない、ほかの蕎麦屋でも探そうかと思っていると、初老の人が現れ、「すいません」と言ってきた。手に野菜を持っていて、長寿庵の主人というのがすぐ分かった。「お店、お休みなんですね」と聞くと、「すいません、体調がすぐれなくて、蕎麦が打てなくて」とのこと。「では、お体をお大事にしてください。また、蕎麦を食べに来ますので」と伝えた。なんとなく名残おしい感じもして、「お体は、やはり震災のせいですか？」と尋ねると、「ええ、震災で年老いた母が体調を崩しましてね。1 つ目の地震は大丈夫だったのですが、この辺りは 2 つ目の地震の方が大きくて、それで精神的に参ってしまったようです。寝たり起きたりの生活をしていたのですが、先日亡くなりました」。由利は、言葉にならずにただ頷いていると、「この辺りは、外目には被害も少ないように見えても、結構大変だったのですよ。店の馴染みのお客さんも三分の一くらいが亡くなってしまった。仕事できる状態ではなくて、しばらくこうして何もせずに暮らしています。いつ再開できるかは、わかりませんね」と長寿庵の主人は続けた。由利は、頑張って早く体を治して店を再開してください、と言おうとしたが、その前に主人が語り始めた。「テレビなどは、復興だとか、がんばろうなどと応援してくれているようですが、うとうといいですよね。表向きの元気なんて、本当のつらさを知らない人のわがままです。私にとっては、静かにそっとしておいて欲しい」。由利は、今まで被災者に元気を出してもらいたいとだけ考えていた自分があったことに気が付いた。ボランティアに行っても、「頑張ってくださいね」とか「元気出してくださいね」とか「応援しています」と言って励ましてきた。すべての震災に遭われた人に同じように言ってきた。しかし、それが、一様に正しいわけで

はないことに始めて気が付いた。「静かにしておいてほしい」と思っている人も被災者の中にはいるわけだし、励ましが煩わしくなる人もいる。被災者に迷惑をかけずにボランティア活動を行ってきたつもりでも、被災者の心の中まで迷惑をかけなかったかどうかはわからない。由利は、あらためて考えなければいけない言葉の重みを感じた。

東北自動車道は雨になっていた。安堵の気持ちを持って 1 つの区切りをつけることができた由利にとって、リフレッシュするには最高の雨であった。「また、ボランティアに行こう！みちのくの人々が、みんな安堵の暮らしを迎えられるようになるまで。

## 終わりに

東日本大震災被災地へのボランティアとして 1 週間ほど活動した後、久しぶりに実家に帰って母に現地の状況を話した。それを聞いていた母から、今まで聞いたことのなかった戦争の体験談が飛び出してきた。母は、先の戦争で姉と兄を亡くしている。兄は海軍に所属し、駆逐艦さざなみに乗っていて、アメリカ軍の魚雷攻撃を受けて轟沈して死亡した、という話は今まで何度も聞かされていたが、姉の話というのはほとんど聞いたことがなかった。姉は、八王子の空襲で亡くなった。その時、母の父（祖父）は何度も姉が住んでいたと思われる場所に足を運んで、なにか遺品が見つからないかと探しまわったそうである。姉は、金歯を入れていたということで、せめてそれだけでも見つからないかと探しまわったそうである。結局、なにも見つけることができず、失意のまま家に戻ったとのことである。また、兄についても、今までに聞かされていなかったことを話し始めた。兄が戦死した後、白木の箱が届けられて、母の母（祖母）は「中を確認したい。何か、遺品があるはずだ」と言ったが、祖父は「見るな!」と言って、絶対に箱を開けさせなかった。しかしながら、どうしても中を確認したいと祖母が何度も懇願するため、祖父も最後は箱を開けることを承諾した。箱を開けてみると、一枚の写真だけが入っていたとのことであった。母にとっては、津波で完全に破壊されて瓦礫だらけになっている被災地の様子と、空襲で焼け野原になった戦争当時の様子が、昨日のことのようになつたのであろう。また、今なお多数の遺体が発見できていない被災地で遺体を探している人々と、何も見つからなかった姉の思い出と臉に焼き付いている写真一枚だけの白木の箱が、残された者の悲しみというものを思い出されたのであろう。戦争と震災、人間が愚かにも殺し合うものと、自然が人間に対して牙をむくもの。全く違うものであるが、悲しみを背負うのはいつもそこで生活を営んでいる一般市民である。また、そこから這い上がって新たな生活を作り出していくのも、そこに住んでいる一般市民である。今回、ボランティアに参加して、わずかではあるが被災者の生の声というものを感じることができた。また、ボランティアに参加している人々の気持ちというものを感じることもできた。被災地で、直接被災者と向き合い、直接活動をすることで分かってくることがたくさんあることを改めて学んだ。同時に、それを記憶だけでなく記録に留めておくことも重要なのではないかと感じ、筆を執った。東日本大震災で、ボランティアを必要とする状況は、まだ相当続きそうである。自然の力の凄まじさ、一人の人間あるいは人間の創造物の弱さ、しかしながら、その中で意志を一つにした人間の集まりの強さ。復興に向けて、さまざまな活動を行っている人に敬意を表するとともに、これからもずっと、さまざまな支援活動に関わられる人々が続くことを祈願して、筆を収めることとする。

[End of document]